

## 第1回朝鮮語及び周辺諸言語研究会報告書

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 崔 昌玉  |
| 雑誌名 | 韓国語学年報  |
| 号   | 12  |
| ページ | 179-182   |
| 発行年 | 2016-04-01  |
| URL | <a href="http://id.nii.ac.jp/1092/00001346/">http://id.nii.ac.jp/1092/00001346/</a> |

## 第1回朝鮮語及び周辺諸言語研究会報告書

崔昌玉  
松山大学

2015年8月23日神田外語学院において第1回朝鮮語及び周辺諸言語研究会(これ以降、第1回研究会と表記する)が開催された。これは第1回研究会の報告書である。

まず、朝鮮語及び周辺諸言語研究会が発足した経緯をここに示しておきたい。この研究会が発足したのは、朝鮮語学を朝鮮の周辺の言語をも含めて、もっと幅広い立場から考えてみようというとても単純明快な理由からであった。この研究会を発起した菅野裕臣先生は、(アメリカにおける最新の理論を朝鮮語の文法現象に適用しつつ、自身の内省によって作例した幾つかの文でそれを説明しようとする)韓国本土における朝鮮語学の方法論を疑問視しており、もっと音韻論や形態論を重視した(前間恭作先生、小倉進平先生そして河野六郎先生といった)先人たちの研究から朝鮮語学を捉え直す1つの契機となる研究会を立ち上げたいと考えていた。そして、この研究会発足の動きは2014年8月から浜之上幸先生を中心として始まり、発案から1年後の2015年の第1回研究会の開催に至った次第である。

先に示したように、この研究会では朝鮮語に関わる研究発表だけでなく、その周辺諸言語の研究発表も今後執り行われる予定である。第1回研究会で発表したのは、菅野裕臣先生、高地朋成先生、崔昌玉、太田誠先生、成澤勝先生、黒澤朋子先生であった。以下では、発表が執り行われた順番に各自の発表の内容に触れつつ、第1回研究会の総括と今後の展望に言及していくことにする(なお、発表時間は各自1時間であった)。

最初の発表は菅野裕臣先生の「モンゴル語—朝鮮語学徒のための概説—」であった。この発表では、モンゴル語の時代区分、モンゴル語の文字から始まり、音素(母音、二重母音、子音)、綴りと音との関係そして形態論(格語尾、動詞語尾、品詞、動詞の文法範疇、分析的な形など)に至るまで、モンゴル語の文法を体系的に記述しようと試みている。特にここで注目したいのは、モンゴル語を音韻論的観点から形態論的観点に至るまで記述しようとする、その研究姿勢である。ある言語を音韻論から形態論そして統辞論へと段階的に研究する方法論はどの言語の文法を研究する上でも重要であり、同様に音韻論から、形態論、統辞論と段階的に学生に朝鮮語を教授することは外国語教育という実践の場にも十分に通用する方法論だと考えている。このような方法論が朝鮮語教育の現場にも浸透していくことを切に望む次第である。

次の発表は高地朋成先生の「現代朝鮮語のモーダルな分析的形式について」であった。この発表では、統辞論的観点、意味論的観点そして(1)モーダルな意味を表すかどうか、(2)話し手の態度に関するモーダルな意味のみを表すかどうか、(3)否定形式の作用領域(scope)の外に位置するかどうか、(4)過去時制形式の作用領域の外に位置するかどうかを含むモダリティーの程度性という観点から現代朝鮮語のモダリティーに関する分析的な形式を考察している。この発表では、便宜上であるが、一般言語学における mood の翻訳語としてのムード、一般言語学における modality の翻訳語としてのモダリティー<sub>1</sub>、言語類型論において主張された通言語的な文法範疇としてのモダリティー<sub>2</sub>を区別している。これらの術語を区別することは高地朋成先生が多くの先行研究をどれだけ詳細に概観してきたかを実証している。また、ここで注目したい点は、何においても、豊富な例文の提示であった。ご存知のように、現代朝鮮語のモダリティーに関わる分析的な形式はかなり多く存在する。これら1つ1つを記述するためには、それだけ多くの例文が必要であることを提示してくれた、貴重な発表だったと考える。

次の発表は崔昌玉の「現代朝鮮語におけるヴォイスと命令との相関関係」であった。この発表は고성환(2003:92)『국어 명령문에 대한 연구』において受身形のうち‘업히다(負われる)’だけが命令法終止形語尾を伴うことができないと指摘していることから、実際の用例では他の有標形でもそのような結びつきがないかを考察し、記述することを目的としている。この発表では、命令に関するサントペテルブルク学派の理論に大きく依拠している。この発表のように理論的な枠組みを採用する理由としては、現代朝鮮語のヴォイスが文法範疇なのか、語彙範疇なのか、あるいは文法と語彙にまたがる語彙＝文法範疇なのか、研究者ごとにその見解が異なる点、そして先行研究で使用している理論が本当に現代朝鮮語のヴォイスの特性に合うものなのかという点を取り上げることができる。また、ごくごく一部の受身形や使役形を記述するのに、大きな理論的枠組みは必要ないという指摘もある。しかしながら、この発表はあくまでも現代朝鮮語のヴォイスを体系的に記述することに念頭を置いたものであって、ごく一部の興味深いトピックだけを取り扱ったものではない。現代朝鮮語のヴォイス研究は発展途中である。この発表が今後の現代朝鮮語のヴォイス研究の進展に寄与し得るものだと考えている。

次の発表は太田誠先生の「宋時烈の政治思想とその文学的展開」であった。宋時烈は次のような人物である。仁祖の第2王子である鳳林大君の師傅(守役)であり、1649年に鳳林大君が孝宗王として即位すると、彼も政権で頭角を現し、それ以後政界に影響力を持つようになる。その後、隠遁と出仕を繰り返しながら、肅宗の時に禧嬪張氏の王妃冊立に西人派の考えをもつ人間として反対したため、済州島に流されることになった。その途中で死去してい



る。この発表では、宋時烈の「春秋の大義」とは何かを明らかにしつつ、孝宗は彼が唱える「春秋の大義」を本当に理解していたかという疑問を提示し、孝宗は彼の「春秋の大義」を宋時烈のように捉えておらず、孝宗に対する宋時烈の評価は従来の考えとは異なると結論づけている。この発表で注目したいのは、やはり多くの資料を概観している点である。太田誠先生は宋時烈の政治的思想を彼の文学作品や他の資料から読み解いている。資料を何ら先入観もなく読み解く重要性を学ぶことができた発表であった。

次の発表は成澤勝先生の「朝鮮漢文の世界—李朝実録と韓国のスタンス—」であった。この発表では、『顯宗大王實錄』巻二の顯宗元年四月壬寅の前半部分を成澤勝先生が直接翻訳し、その内容に照らし合わせながら、朝鮮王朝時代の思想などを提示していた。特に興味深かった点は、「特」を動詞として独自の翻訳をしていたところであった。この考えは先行研究では指摘してこなかったことである。このような解釈をしたのも、資料を丹念に読み込んでいるからである。この発表を通じて、実際の用例を丹念に考察する重要性を再確認することができた。

先の2つの発表は文学に関するものだった。言語学と文学は相互に関係する存在である。最近、ローマン・ヤコブソン博士の翻訳が出版された(桑野隆・朝妻恵理子編訳(2015)『ヤコブソン・セレクション』平凡社)。その翻訳書を読む限り、言語学者としても有名なローマン・ヤコブソン博士が言語学だけでなく、詩や文学作品にも関心を持ち、それらを様々な観点から考察する博識さに舌を巻くばかりである。報告者が言語学も文学も研究対象として捉える実力を備えていないことは重々承知している。しかし、とにかく文学と言語学の関係において外国語を日本語に翻訳するという面にだけが注目される中、詩や文学作品を言語的にとらえようとする研究が日本や韓国でもあっても、おかしくない。今後、このような研究が現れる期待を大いに抱いた2つの発表であったこともここに合わせて付しておく。

次の発表は黒澤朋子先生の「香港の言語事情：幼児への書き言葉教育—2歳児の場合を中心に—」であった。この発表は、香港の幼稚園で使用している資料(書籍、新聞、掲示、字幕)などを考察し、香港の言語事情を説明していた。この発表も実際の資料を重要視しているという点で他の発表者と研究に対する立場は同じである。ここで発表の一部を紹介すると、香港における書き言葉と話し言葉の間の相違は甚だしいが、香港の幼稚園では書き言葉の教育が2歳から始まるということである。また、この発表で2歳児がどのように書き言葉を勉強していくのかを示しており、言語教育にも何らかの指針を与えてくれる発表であったことは確かである。今後、他の外国語教育と比較対照すると、興味深い考察結果が出るのではないかと考える。

最後の発表は菅野裕臣先生の「音素設定の2つの段階について—日本語と周辺言語に関して—」であった。この発表では、多くの韓国人言語学者から

受けた、日本語の撥音「ん」に対しての質問を提示するところから始まった。次に、現代日本語や現代朝鮮語だけでなく、様々な言語の例も提示しながら、モーラ、アクセント核、相補分布そして形態音素を説明している。どの説明も的確で、音韻論を全く知らない人たちにも分かりやすいものであった。また、この発表で驚くべきことは、様々な言語の音韻論に関する情報が余すことなく提示していることである。最後に、日本語、朝鮮語、モンゴル語、トルコ語、英語、ドイツ語、ロシア語、ポーランド語、フランス語、アイヌ語、漢語(普通語)そしてドゥンガン語の音素設定を提示している。この発表を通じて、実際の資料を考察する確かな観点と音韻論的観点が文法研究においていかに重要であるかを改めて認識させられた。

第1回研究会を総括すると、資料や実際の用例を疎かにしない態度で考察した、素晴らしい発表ばかりであった。とにかく何の先入観や固定観念にもとらわれることなく、ありのままの資料を考察すること、そしてそれを考察する観点を先行研究から学ばなければならないことを改めて学ぶことができた研究会であった。

今後の展望はこの研究会において中期朝鮮語、現代朝鮮語(標準語、方言)だけでなく、現代日本語(標準語、方言)、琉球語、アイヌ語等々に関する発表なども幅広く執り行われてほしい。また、今後、この研究会が何の固定観念や先入観もなく、自由に自らの発表ができる研究者の場になることを期待し、第1回研究会の報告を終えることにする。